



米ソから米中へ ～ 冷戦から多極化 ～

当麻 実

【米ソ軍拡競争のなかで】

その昔、米ソ超大国ということばがあった。世界は資本主義陣営と社会主義陣営にわかれていた。1973年11月7日、私はモスクワの「赤の広場」にいた。

この広場に入るには厳重な警備のチェックがあった。モスクワの天気は冷たいみぞれが降っていた。この日は、1917年のロシア革命の記念日。米ソの軍拡競争の象徴である大陸間弾道弾(ICBM)、中距離核ミサイル、戦車、軍隊、労働者などの行進がつづく。いまでもあの日の寒さを覚えている。

前夜はクレムリンの大会宮殿で、ブレジネフ書記長の演説を聞いた。休憩に入ると、ロビーには数々の勲章を胸につけた老軍人を目にした。この人たちは第二次世界大戦を戦った元高級将校たちだ、と思った。

世界は米ソに大きく二分され、イデオロギーの相違はわかりやすかった。とはいえ、1980年の夏、家族4人でシベリア旅行をしたとき、駅構内の写真を撮ろうとすると禁止されるという不自由な時代であった。

【崩壊前夜なにかがおかしい】

やがて、1989年11月、東西ドイツ分断の象徴ベルリンの壁が崩壊した。この年の8月、私はモスクワでの「セミナー」に参加した。従来は「わが国はかくのごとく発展している」という学者や専門家の意見が多かったが、このときの雰囲気は大きく変わっていた。「日本の生産性はどのようにあげているか」「ヨーロッパ各国の共産党の動きをどう見るか」など、かつての社会主義の優位性の議論がしぼんでいた。ソ連邦は経済的、政治的にも矛盾が大きく露呈していたのだろう。イデオロギー担当者からは相当な危機感が感じられた。

1990年10月東西ドイツは統一、東欧で政権崩壊があいっいで起きて、ついに1991年ソ連邦は崩壊した。

【欧米ブランド品のお店に】

気になるのはソ連崩壊後の状況だ。もはや米ソ超大国とはいえない。2006年10月、モスクワ市庁舎で開かれた「日ロフォーラム」に参加する機会があった。会議は日ロの政治・経済協力、文化・人的交流など多岐にわたっていた。

北方領土問題も議題にあったが、ことは簡単ではないという印象をもった。



サドブニチ・モスクワ大学学長と筆者
(2006年の日ロフォーラムにて)

その前年、極東のウラジオストクからロンドンまで列車の旅をした。そのときモスクワのグム百貨店に寄ったが、すっかり欧米の高級ブランド品のお店に変わっていた。

【激化する米中の対立】

いまやGDP(国内総生産)がアメリカにつぐ第二位になった中国はどうか。1976年6月、私ははじめて北京空港に降り立った。空港内には香のにおいが漂っていた。いまもこの香りが残っている。天安門広場や道路は車がほとんどなく、人民服姿で自転車が中心であった。紙幣は外国人が使う兌換券で、おつりは油にまみれた人民元であった。

その後何回か中国を旅した。中国の改革開放政策で経済成長は一気に加速された。都市と農村の格差など矛盾はあるが、中国はアメリカと競争する大国になった。かつての米ソの対立のようだ。私が所属するアジア研究会では、中国の現状分析の議論が活発だ。米中の対立は香港、チベット、台湾、ウイグル族問題などで、根深い対立になっている。

【自国中心でなく互いに協力を】

世界は米ソ冷戦時代とは違う状況がつくられている。前トランプ大統領のアメリカ第一主義、イギリスのEU離脱、中国の一带一路構想など、かつての冷戦構造とは違う自国第一主義がはびこり多極化している。例えば、新型コロナウイルスのワクチン接種はどうか。自分の番はいつくるのか。米中英など接種は進んでいるが、アフリカ諸国はいつワクチンが確保できるかわからない。WHO中心に各国はもっと協力してワクチン供給をすすめてほしいものだ。